

# 眞生

第六卷 第五號

× × × × × × ×

□或る人が言つた、自分は自由を尊ぶ、だから念佛だの、題目だの、座禪だの、  
そうした形式ばつたことは一切きらいである。尤も私も初めの間はさうしたこ  
もやつて見た、乍然今日の私にはそれらの一切が私にはいらなくなつた。

□私はこの話を聞くと共に、それも亦尤もなことであると思つた。何故かなれば  
今日の多くの人々の間に勤められる所の、多くの念佛や、題目、並に座禪そのも  
のが、殆ど此の人の意味するやうな精神のこもる形式ばかりの座禪や、題目や  
念佛ばかりであるからである。

□乍然、喉の渴きき、腹の飢けた時、飲むとか、食ふなどは形式であるとして  
それもさらずに捨つべきであらうか、飲むこと食ふことは喉の渴けるもの、腹の  
飢けたものにさつてはそれを醫する爲めの當然の方法であらう。

□而て、宗教に於ける念佛、題目、並に座禪、觀法の如きは丁度それが渴いたも  
のが水を飲み、飢けたものが食を求むるのと同じである。何等の飢も感ぜず渴  
も覺ない人々に強て食をこれ、水を飲むべしと勸むるも、それはその人にさつ  
て全くの迷惑であらう。

□乍然、凡そ此の世に於て、食もなく、水もなくして、渴も覺せず、飢も感ぜぬ  
人々があるであらうか。若し此の世にさうした人々があるならば、その人は恐ら  
くは此の世に死せる人々である。

□丁度、それと同じく、此の世に於て、若も眞に正しき念佛もいらす、題目も座  
禪も自分にはいらぬと云ふ人があるならば、恐くは未だその人は眞の宗教の何も  
のたるかも知らない人である。

□凡そ眞實の宗教は宇宙の生命と自己の生命とが一つなるの道である。此の道  
を外にして、どこに眞實の宗教があり得やう。神人が合一し、佛凡が一体となつ  
て、そこに始めて、新しき眞人の世界は展開せられて來るのである。而てその合  
一の道、一体の法、こそは即ち宗教に於ける念佛或は題目、若し座禪の方法を外に  
してないのである。(念)

× × × × × × ×

りへ救を汝仰信の爾

目次

- ◇ 爾の信仰汝を救へり 冠子
- ◇ 宗教の人格的内容に就て 士屋觀道
- ◇ 稱名念佛の意味に就て 士屋觀道
- ◇ 願行 佐藤忠義
- ◇ 我信念を省みて 今非善吉
- ◇ 如是我觀 百々治之助
- ◇ 念珠よ 鷲津太一
- ◇ 吾朋便り

□「私の病氣も愈々今度は駄目かも知れませんが、それを思ふと何だか淋しくてなりません」

○「全くですわね、口で何と旨く慰めて呉れても、一緒にいついて来て呉れる者は一人だつて有りやしないですからね、それも已むを得ないでせう、皆んな獨りで生れて来たから一人で死んで逝くのです、妻だ子だ朋達だと云ても生きてる間の事です、永久に皆バラ／＼の人間が一時伴れ添てゐたのに過ぎませぬ」

□「本當にそうでせうか」

○「そうですとも、皆タツタ一人でトボム、辿る永劫の旅人です、而も過去に爲した善い事、悪い事の一切を背負てこれからも永久に生きてゆくのです」

□「若しそうだとしたら、私は本當に恐ろしくてなりません」

○「けれど過去は過去として本當に悔ひ改めた時は、過去の瑕は有るが儘で邪魔にはなりません。恰度星の輝いてゐる處へ太陽が昇て来たやうなもので、一度に今迄の星の光りが太陽の輝きの爲めに蔽はれて了ひます、そして唯だ赫々として善心が輝くだけです」

□「……」

○「私達は性來善人でも悪人でもありません、だから善人の儘で悪人になつたり、悪人の儘で善人になつたりしてゐますだから如來様は過去にどうであらうと、それを咎めやうとも褒められやうともしません、たゞ現在眞に懺悔廻心して本心になつてゐることを望んでゐられます」

◇ イエスが救世主であることを聞き傳へて、澤山の人々が来て救ひを求めました。

◇ 血漏を患ふ女、盲人、跛者、啞者、癩病、鬼に憑かれた者など、到る處へ殺到して來ました、そして「爾何を求むるか」と訊ねられた時、皆その病の癒治されん事を願ひました。イエスは淋しく感じられたこととせう、心の曲れるを治さうとする者は一人もなく、唯だ身の病を療さうとあせつてゐる者ばかりであるからです。

◇ けれどイエスは黙て軽く領いた儘、手を執て「病ひ癒へよ」と立ち所に治してやられた。眼の明いた者、足の立た者、癩病の癒へた者は雀躍して喜びました、其時イエスはいつも「決して人に言ふな」と厳しく戒めて私が治してやつたのではない「爾の信仰汝を癒せり」と教へられた。

◇ 世間の人々はイエスは奇蹟を行ふ者だとして驚き怪しみました。けれどイエスの眼には一つの神秘も奇蹟も無い。治したいといふ一念がその人を治してゐるのだ「神の力」を失つて病氣をしてゐた者が、再び神のみ方に生かされた時、必然に病が癒へて、さながらの健康に復活したのである、治して呉れた人に感謝すべきでなく、自らに憐なり——自らを癒して下さつた——自らの神に感謝すべきものであると思つてゐられた。

◇ 自己を最善へ向て癒してゆく自己が自己の裡にあります。だから自己が其衷心の自己に向て歸命した時、自己を自然に癒し、自己が自然に癒されてゆきます。爾等の信する如く爾等に成るべし」と云てゐられます。

◇ 私達はめい／＼に、自分を治し救てゆく力を持てゐます、それが如來さまであります。其力を持って居り乍ら其力が充分發揮されて居らぬものだから「病んだ人」「淺間しい人」として睡てゐます、しかし一度其本心が目醒め、活動し初めた時、人は誰でも至善の人——如來の姿に還らざるを得ません、妄念は凡夫の體」ではあるが、その妄念が菩薩心に轉じた時、凡夫は盡きて佛の人格に變じます。あ、爾の信仰汝を救へりです。(冠子)

## 宗教の人格的内容に就て

土 屋 觀 道

私は多くの宗教を見るにつけ、其の宗教がどの位眞の宗教に近いのかと云ふことを考へると共に、又その宗教が果してどんな形式と内容とを持つて、人類の上に現はれているのであるかと云ふことを考へずには居られない。而も其の事は單に世間の宗教に對してさうした考へを持つばかりでなく、私は自身も信じてゐる自分の宗教に對しても常に一面に此の態度を維持してゐる一人である。乍然此の事によつて私は常に社會の宗教の如何なるものであるかを知ることができると共に、又それによつて私自身の宗教の如何にあるべきかを教へらるゝことが甚だ多い。

例へば之が爲めに、世間で熱心に信せられ、之ほど進んだ宗教はないかのやうにもてはやされてゐる宗教も、其の宗教の形式と内容との研究によつて、案外つまらない一種の迷信に過ぎないものであることを知ることができたり、又時には己に社會には葬りさらされて、過去の宗教として、残つてゐるやうな宗教の中に於て、之を研究し來る時、反て多くの新しい眞理を私共に與へるものゝあることを發見するが如き、或はまた、自分自身の信仰が非常につまらぬものかのやうに感せられた時に更なるの信仰の内容を反省することによつて、反てそんなつまらないものでないことを知つたり、或は亦、時には自らの宗教のみ完全無缺のものゝやうに思つていた宗教も之が形式と内容とを時々反省することによつて、案外新

に考究すべき形式と内容とを發見するが如き之である。

### 二、

この意味に於て、私共は一つの宗教を見るに、いつも其の宗教の形式と内容とに於て、一層深き注意と反省とを要するものがある。何となれば私共は一見その宗教が同じ形式と内容とを持つてゐるかに見ゆるものも、靜に其の宗教の形式と内容とを研究するにつれて、其の宗教が全々相違するものであつたり、又一見その形式と内容とが相反するかに見ゆる宗教が、其の實、全く同じ系統より流れて、同精神と内容とに立脚せるものであつたりすることを發見することが度々である。

然に多くの世間の人々は此の理を知らずして、同じ形式と名目でさへあれば皆悉く同じ信仰であり宗教であるかのやうに考へたり、又その形式と名目とが異なれば其の宗教の内容までも一々に異なるものかの如く考へる人のあることは更に注意すべきことがあらう。

### 三、

然ば如何なる宗教が最も進歩した宗教であり、又最も完全に近い宗教であらうか。若しこのことが私共におぼろげ乍らにも判然しないものならばどうして、此の宗教は正しいのだと云ふことを知ることができやうか、それは全く不可能なことになる。

茲に於て私共は如何なる宗教が眞の宗教であるかを知ることのできる何等かの根本標準がなくてはならない。言換れば完全な宗教とは如何なるものかと云ふことである。即ち宗教といふ宗教の中、如何なる内容の宗教が眞の宗教であり、又眞に完全なる宗教であるかといふことから明にせなければ眞の宗教がどれであるか又眞に完全な宗教がどれであるかも確定することはできないことになるからである。

然にこのことは一見、甚だ容易のことのやうであるが、其の實之を嚴密にするならば未だ如何なるものを宗教と云ふかといふことさへ、今日の學問としては確定せられない有様であるが、かと云つて宗教

とはいかなるものか判らないかと云へば之又宗教が政治でなく、又商賈でなく、科擧でなく、哲學でないこと云ふこと位のこととはもとより判然としてゐることである。だからして、宗教とさへいへば如何なるものか位のこととは判然してゐるかにも見える。而も凡そ如何なる民族にも殆ど何等かの宗教のないものはないのであつて、そこには何等かの宗教と名づくべき宗教の形式と内容とを持つていないものはない。而もそれらの宗教に於て如何なる形式と内容とを持つてゐるものが最も進んだ宗教であり、又最も完全な宗教であるかと云ふことになるならば、私達は私達自身の考へ得る範圍に於て何を最も進歩したものであり、又最も完全なるものであるかと云ふことの根本標準となることのできるものによることと信ずることのできるあるものによるより外に仕方がない。

然ば私共は如何なる形式と内容とを持つてゐる宗教を最も進歩した宗教とし、又最も完全に近い宗教とするのであるか、そこには自ら現代人の是認し得べき根本標準がなくてはならない。之を名づけて私は宗教的價値と云いたい。

## 四、

然ば其の宗教的價値とは何であるか、私は之に答へて永遠の生命と無限の向上とを與へるものがそれであると云ひたい。永遠の生命とは不死の自覺であり、無限の向上とは價値の生活、人格の完成である。而して不死の自覺と價値の生活とは如何にして與へられるか、それを與へるものが即ち宗教である。

この意味に於て、眞の宗教とは私共に此の永遠の生命と無限の向上とを與へるものである。而て之に反するものを迷信といひ、私は之を宗教の中に入らざるべきでないとする。尤も迷信も一つの宗教でないかと云ふ人もあるかも知れぬが、それは少くとも眞實の宗教ではない、故に若しも、それをしも宗教と云ふ中に入れるならば、永遠の生命と無限の向上とを要求してゐる姿に見ゆると云ふ形式の意味に於て暫く之をも宗教の中に入れるであらう。乍然その意味並に内容に於て、最も永遠の生と無限の向上とを

完全に與へるものを宗教とするならば決してそれらの迷信を以つて宗教なりと云ふことは許されない。乍然その宗教が己に幾分でも永生と向上とを要求してゐるものであり、又幾分でも其の形式と内容とを持つてゐるならば確にそれをも一種の宗教として是認すべきである。而て其の永生と向上の内容を最も多量に内包せる宗教をこそ最も進歩した宗教とし、又最も完全に近い宗教であるとすべきである。

乍然茲に於て、更に私共の考へねばならぬことは然ばその永遠の生命とは何であるか、不死の自覺とは何であるか、又、無限の向上、價値の生活、人格の完成と云ふことは如何なるものを云ふのであるかと云ふことである。若しさうでないならばそれはたゞ、單なる言葉の置換に過ぎないのであつて、問題そのものには何等の解決をも與へるものでないからである。

然らば人格の完成とは何を云ふか、それは云ふまでもなく、私共の全心全意の要求する完全なる理想實現の生活そのものと云はねばならぬ。然に私共の本心は如何なる意味に自己の完成を要求するかと云ふにそれは永劫に不死の自覺にあつて、偽を捨て、眞に入り、醜を棄て、美につき、惡を廢して善に進むの生活である。而も此の三つを離れない全心全意の統一的中心生命の要求するものが宗教である。此の意味に於て、眞實の宗教は私共の理想人格とも云ふべきものであつて、所謂完全なる宗教生活とはかゝる意味での一切を云ふのである。

然乍ら一口に偽惡醜と云ひ、又眞善美と云ふけれども、その偽惡醜なるものが如何なるものであり、眞善美が如何なるものであるかに就いては更に一層の考察を要すべきものであつて、之又簡單かたづくべきものではないが、宗教の本質はむしろ之等の價値生活の根本依據となるものと云ふべきである。此の意味に於て宗教は又一面永生と向上との中心生命に歸命するところの一種の信仰であるとも云へる。而てそこに全人格の統一も亦自ら現はれて來るのである。

## 五、

この意味に於てすべての宗教は各々その人の人格の程度に於て、其の信仰の内容も、各々異つて來ると云はねばならぬ。從てその人その人の宗教は其の人の人格の程度に於てその内容も亦變つて來ると云はねばならぬ。

從つて人格の内容高き人々の宗教は其の信する宗教の内容も自ら高く其の人格の内容低き人々はその宗教の信仰内容も亦自ら低いと云はねばならぬ。從て、多くの人々の宗教に於て、果してそれが正しい宗教であるか否を知り、又それがどの点まで進歩した宗教であるかどうかが知らうとするならば私共は充分に之等の關係を反省すべきである。即ちその宗教が持つて居る思想信仰の内容がどれだけの宗教的價值しているかどうかの反省である。而も亦それがどれだけの哲學的價值と科學的眞理と道德的善と藝術的美とに於て眞の調和を以つてゐるかどうかと云ふことを充分に省察すべきである。この意味に於て、私は私自身の信仰なるものを、いつも此の一点に注意して、常にその信仰の形式と内容とを充分に反省させられてゐるものであるが、自分の宗教が眞に眞善美を内容として、如何に眞實の宗教に近いかと云ふことは此の方法によつて、一層私共はそれが眞の宗教として最も正しい信仰であり、最も進歩した宗教であるかと云ふことを知ることができるのである。更に詳言すれば果して私共の宗教が其の宇宙觀人生觀に於て今日の最も進歩せる科學、哲學、道德、藝術に於て各自の本心に全心の満足を得る絶對の宗教であるかどうかと云ふことも之によつて始めて眞に知ることができるのである。

## 六。

さて、私達はこゝまで考へて、今日の宗教を眺むる時、果して、何れの宗教が之等の批判に最も正しいものとして與へらるゝであらうか。今日の多くの既成宗教に於て、それがどれだけ今日の科學及び哲學と眞實の意味に於て、眞に多くの人類を指導するほどの眞の中心となつてゐるのであらうか、現代の教ゆる科學哲學の人生觀と宇宙觀とが從來の宗教が教ゆる人生觀と宇宙觀とに於て、あまりの矛盾懸隔

の大なるものがあるではないか。そこには既成宗教の大なる反省を要すべきものがある。殊にそれにもまして、更に考察せらるべきは今日の既成宗教のとりつ、ある道德的宗教生活である。宗教の目的は云ふまでもなく人格の完成であつて、決して人格の墮落ではない。いかなる罪深きもの、愚かなるもの、雖も、皆悉く眞の信仰に入らしめて自己の本心をして自由の天地に立たしむるにあつて、決して道ならぬ生活に止まつてよいと云ふものではない。どこまでも及ばぬ乍にも自ら眞實の生活に生きようとするものが即ち人格的價值の生活であらねばならぬ。苟も神を信じ、佛を信ずると云ふものが、道德的非行を爲して、それですむと云ふべきものであつてはならないはずである。この意味に於て眞の宗教が人格的内容に於て、最も完全に之を具有すべきことは勿論である。

然ば友よ、私達の宗教は果して如何なる宗教であるべきか、靜かに自らを反省して、夢にもかゝる非行の生活にあつてはなるまい。たとへそれが如何に自らの力足らずして、思ふにまかせぬことがよしあらうとも、そこを如來の大悲に救はれて限りなき眞人の生活に自らを生かすと云ふことこそ、此の世に於ける眞人の理想であり、又此の世に於ける人類としての價值であらねばならぬ。

されば人とし人と生れ來て眞實の人として生きるにはそこに人格的内容の充實せる宗教によるべきではないか、而もそれこそ眞に人としての生き涯ある生活といはねばならぬ。從つて價值ある宗教の内容は又自からそこに價値的人格の内容を内包するものであることを知るべきである。(二、四、二一)

## 稱名念佛の意味に就て

(或る道友の質問に答ふ)

土屋 觀道

○〇様、御便り嬉しく拜見いたしました。御病氣で充分に御念佛が御出にならないうこと、それならば何もわざわざ聲出して御念佛申されなくても決して御心配はいりません。心から如來の本願を信じて、之に南無する心さへあれば、その南無する心のあらはれが已に南無阿彌陀佛であるのであります。たとへて見れば若し私が啞者であつたどします。然に早朝知人に遇つてお早うとあいさつしたどします。此のときお早うと人の耳に聞こゆるやうに聲を出せなくとも、お早うと云ふ表示は言葉以外の何ものかによつて表はさるればやはり私は啞であつてもお早うと申したことになるではありますまいか。如來の本願念佛も之と同じだと私は信じてゐます。だからどうぞ如來よ救へ給へと如來様に合掌するの事實さへあれば必ずしも聲がなくても啞でも助かるのだと御承知下さい。

血涙を以て祈らざるを得ざるに到る。これ信仰たりとす。  
生物進化してこゝに信仰の生活は到來し、信仰の生活は遂に佛陀の願行に我が願行を等しからしむるに到る。是れ佛としての生活に自己の生活を立つるにあるなり。この願行を以て無上道となす。この理想たるや永劫不滅、莊嚴崇高なり。佛教の根本こゝに歸す、八萬の聖經この理想を尊信せしめ、この理想を實現せしむるために啓示せらる、宣なる哉、古來、真人の血を湧かしの真人を奮ひ立たしめ、世界に偉業をなさしめ、燦として古今を貫けり。最高の理想には最高の實行これに俱ふ最高の願行は、價値の生活にあり、價値の生活とは念佛の生活これなり、念佛の生活とは佛凡一体の生活にして、宇宙の理想を自己に實現するにあり、自己の宇宙的使命に全く立つにあるなり。  
真人この無上道を仰ぐとき共に歡喜讚歎せざるを得ず、其の光明顯赫なれば愚人は恐怖し顛倒しかへつて嘲り辱め憤る、曾てはこれ等の心イエスを十字架に上せたるなり。而して今やイエスを嘲

い。この道理がお判りになりましたら、きつとあなたの御質問になつた、聲の出ないものはどうするかとの問題も自ら解決することだと思ひます。

## 願行

佐藤 忠義

靜かに觀すれば、生きとし生けるもの悉く願行ありて其の願行は萬物の生活をなせり。

地獄の生活は地獄の願行なり、餓鬼の願行は餓鬼の生活をなせるなり、こゝに地獄は地獄の生活を以て一切を焼き、餓鬼は餓鬼の生活を以て一切を陥れ居れり、而して萬物願行の基因するところを觀れば、「死に度くない、よくなりたいたい」この二つの靈能に歸せざるを得ず、この靈能よりして六道の願行は顯現し、六道の願行、進化して四界の願行となるなり。

進化とは何ぞや靈化これなり、靈化の道程は迷悟の争闘にあり、吾人煩惱頻烈にして煩惱は煩惱と争闘し、より低き願行はより高き願行と争闘し斯如争闘止むところなく、遂にこの争闘の裡より

り辱めたる者は影もなく、この理想に生きしイエスは永劫を貫きて今現に瞭然として生けるなり。

あ、偉なる哉！ 超世の願、我等の理想よ！

こは永劫の眞理なり、永劫の光明なり。

我れこの超世の願を立て、而して自己を内省するるとき、心暗くして作すべき事を常に怠り、作す可からざる罪を造る、自らの過ちの甚だしきに眞に泣かざるを得ず、而して自力を以てこの願行を成就せんとするとの、あまりに無智なるを知るに當り、若し念佛の一行なくんば、我れ自暴自棄に一生をはつるか、或は自殺するのほか道なし、然して一度びこの願行道を仰ぎし者は其の本心の要求を裏切ると能はざるなり。

こゝに於てか唯、歸命あるのみ、身心を捧げての歸命あるのみ。懺悔によりて歸命し、歸命によりて我れは生く。この崇高なる理想に廻りて、我が生活は反省と精進の生活となり、懺悔と向上の生活となり一切供養の願行道に立つものなり。

(二、四、三〇)

# 我が信念を省みて

今 井 善 吉

奥様益々御壯健に眞生運動の爲めの御活動は尊く感謝の至りであります。

奥様、私が大正十三年十二月三日極樂寺で始めて御上人様に御會しまして色々人が聞いてもハラ／＼する事をぞし／＼御質問申上げ眞に生く可き道は此外に無いと深く臆に銘じましてから省みれば今は早や二年と二ヶ月を経まして月日は水の流れる様に早いものです、最早永久に歸らぬ月日を私は無駄なく送つたのでありませうか？如何したら眞實に生きられるか……は私は長い間の心の悩でありました其悩は御上人に依り念佛精進する方法を御教導に預りました爾來無我夢中で二ヶ年餘念佛で猛進致しました、靜かに自己の行動を自分自身考へます時、我ながら狂氣じみて居つたのに氣附きます、唐澤山でも人一倍無茶で澤山の人々を苦しませた事がありませう、バクレツダンの異名まで頂戴した事が思ひ出されます、然し奥様それも皆水と共に流れた過去の追憶となりました、奥様、靜かに私の現在の信

念を省みますと、荒れに荒れ狂つた大浪がいつしか靜まり返り海上波靜かに太陽さへ照り輝く氣分であります、今までのイラ／＼した氣持もいつしか消え失せ今は洋々たる心の廣さを感じしかも其の中に無限の心強さを感じます、百萬の人と雖も私自身を如何ともなし難い大金剛心を得さして頂きました、奥様、今はたゞミオヤの慈光の裡に専念稱名念佛あるのみであります、お念佛唱えさして頂く其の處に無限の力と喜びと望みを感じさして頂くやうになりました、一擧手一投足にことごとく生甲斐を感じます、奥様、私は我身も我心も捧げて如來につかへたいと心から念願して止みません、私共の眞善美の價值的生活を一日一日一歩一歩人格の向上ではないでせうか、そこに價值的永遠の生命も不滅であります何卒此上ともこの愚かなる私を御指導下さいませ。

## 如是我觀

百々治之助

### 一、生命

生活機能を有するもの、所謂動物を殺すことだけが、殺

## ▼吾朋便り

▼燒津町 片山さき様より

先頃來は甚御厄介になりました、御名殘惜しくも御別時中途にて御暇を頂き下山いたし實に残念に存じました。小兒を連れて居りましたので御一統様方に御迷惑の掛らぬ中にさ下山いたしました、迷へるものを御いつくしみ下され御引止め下さる御慈悲の程、誠に有難く深く感泣いたしました、又來る唐澤のお別時に加はりひたすらに御慈光に浴したく、今から來る喜の日の近からん事を待ち詔び申上ります、來月も御縁合せ御惠を御待ち下さる事と存じ喜んで御待ち申居ります、御集りの皆々様ます／＼御修養の御事と御幸福な事祈り上ります、長の御指導にて御疲勞の御事と御見舞申上ります、御健勝の程祈り上ります。

▼清水市 松永光子様より

お上人様、御無沙汰致しましませ御許し下さいませ、いつもお變り無き御活躍振り盛ながらお喜び申して居ります。いつしらす春も半ばとなりました、梅も散り桃も又櫻も、そうしてやがて青葉の頃となるので御座いませう、かうした時の歩みと我身の歩みとを想ひ合せた時、言ひ知れぬ淋しさを感じます。先生の御教へに觸れてよりはや四年目になります、それを想ふと全く涙が出て參ります、併し御教を知らなかつたならばさ

思ふさほんさうに感謝にたへません。

御上人様、併し私はほんさに身の幸を想ひます、世の中に不幸さいふ事はない筈ださいふ事をしみ／＼と考へ得る様になりました、私の家は今全く疲弊して居ります、物質上そして永い間病んで居る姉、姉はもう長くはあるまいといはれて居ります、併し精神上に於ては家族共皆平和の中にくらして居ります、私は父母姉弟に全く感謝します、父は決して暗い顔をした事はございませぬ、姉もありませぬ、弟は知識は何もありませぬがよくまじめに働いて居ります、學校六年で其ま、働いて居るのです、私は全く合掌します私一人満足に仕へる事の出来ない拙さを、ほんさうにすまなく思つて居ります、路端の一木一草も學問の種ならぬはなきさか、世のすべては恵みでないものはございませぬ、私等はかうしたまづしい生活の中にも無限の喜びを感じて居ります、私の願ふ所はたゞ／＼眞理へ對する勇氣をもつ／＼ほしい事でございませぬ、そして明るい智慧さ、たゞ／＼如來にすがつて祈る事で御座いませう、御身御大切に、御奥様にも美智子様にもよろしく御傳へ下さいませ。

▼大阪 藤田高印様より美和子へ

嚴寒の折から、みなの慈光裡にます／＼御健康にいらせられ、こよなう嬉しく賀し上げ申します。其後は心にも無き御無音に打過ぎ、何ともお詔びの申様も御座

生であるとのみ考へて居たのは、私の入信當時頃までの、  
認見であつた。

鳥獸蟲魚等、生理學上の意味に於ける、生き動いて居るもの、生命を奪ふことは、仁者の爲すべきでは無からう。乍併所謂殺生とは、此の意味に於ける、生命を奪ふ事ばかりで無く、本當の生命を殺すことであることを考へねばならぬ。

一枚の紙には、一枚の紙としての全生命がある、一粒の御飯亦御飯としての生命がある、動物は生理學上の生命の外に各自固有の本當の生命がある、人間亦然りである。此の意味の生命を識らないで、一枚の紙一粒の飯一片の肉片を粗末に棄て、又自身が閑人なりとて他人の尊とき時間を潰させる事これ其生命を殺すことである。此本當の生命を無駄に殺すこと、これこそ殺生の大きなものと謂はねばならぬ。

一枚の紙、一粒の飯、一片の肉片も、有効ならしめ、一時間の他人の生命をも、生かさしめ有効ならしむる事、之れ即ち其生命を生かす所以である。此の生命を生かす事は即ち他を生かすと同時に、自己を生かす所以であると謂ふことが出来る。

## 二、價値

經濟上の意義に於ける生産的なるものにのみ價値を考へて居たのも私の過去に於ける誤見であつた。乍併價値なることは敢て之に限局せず社會現象有ゆるもの、總てが吾人に對する關係に於ける價値なることを考へねばならぬ、殊に我々自己の現在生存する生命の價値はよく考へねばならぬ。

本來我々は價値の多いのを好むのである、例へば一個の物品を購ふにも、可成價値の多い品を得やうとする。之れは金錢の價値を多からしめ、物の價値を尊むことで、誠にさもあるべきことである。然るに私は金錢や物質に之れだけ深い注意を拂ひながら一方それよりも一層大切な私自身の生命の價値に就てそれ程に感じて居なかつたのである。自身の尊き生命を無駄費ひにし、時には自身の生命の價値を害する事に自身の生命を費ふて居てそれに少しも心付かなんだのである。

いませんに逆に御尊書に預り、おなつかしい水壺の  
あこ、繰返し／＼拜見させて頂きました、小尼などの  
上にいろ／＼御心配をかけほんごうにすまない事で御  
座います。(中略)

毎月上人様御遠方の處、私共の爲めに親しく御來阪下  
され御厚き御指導を受けつゝも、小尼の様な有様で何  
等其の御高恩に報ゆる事も爲し得ず、御苦勞かけた上  
に尙御心配ばかりおかけいたし何とも御詫びの申上様  
も御座いませぬ。

▼尼崎市 橋本信吉様より

時下甚寒の鞠、益々御健勝を御悦申居ます。過般來引  
續き御巡錫無事御歸堂さば思ひますが、定めて御疲勞  
被遊候儀とお察し申ます。御高庇にて我々は御指導に  
依り日々快活に精進し得られ候事を感銘して居ます  
(中略)

時下折角御自重祈上ます 合掌

▼東京にて 渡邊入右衛門様より

先日はいろ／＼御心配下され難有御禮申上候、御座に  
て追々快方に向ひ来る二十日頃迄に歸國致す心組に御  
座候。御上人様には焼津より行基寺に於て貴き獅子吼  
を續けられ嘸々御疲れの御事と奉察上候、何卒御無理  
を遊ばされず充分御身休御注意下さる事を呉々も御申  
上ます。

▼神戸市外西灘 弘中玉子様より

一昨日は藤村様の御宅にて、いろ／＼と有益なるおは  
なしを給はり、ありがたく仕合せ申候。廻路に参り居  
候長男にも、いたゞきし佛教講座を送附致すべく存じ  
居り候、ついで雑誌も御送附頂き候へば幸に思ひ居  
り候、東京青山の妹の宅へも御送りをわがひ度申居り  
候處、都合にて近日他に轉宅いたす様御承知給は  
り度候、いづれ住所きまり候節には、本人より御伺ひ  
申べく候間よろしく御願ひ申上候。先は右まで、可視

▼四日市市 服部源市郎様より

謹啓 過日は早朝より御那覽色々御話拜聴、難有奉謝  
候、其後日々各所御巡錫の御事と存候、陳者來る廿八  
日拙宅へ御來駕の儀、何時頃御光來下され候哉、何分  
初めの處故御案内申度と存候間、四日市着氣車時間  
前以て御通知被下候は、停車場にて御待受可申萬事好  
都合かと存候。實は明後廿七日名古屋にて御面語仕度  
と存居候共、目下市會の調査委員會開催中にて或は出  
抜け兼ね候哉と存候間、乍失禮に書中御伺ひ申候次  
第、何卒不惡御承引被下度、何れ委細拜肩の上に可讓  
不取敢右得貴意度、如此御座候。敬具



念珠よ 私の手首にかゝつてゐた念珠よ、今までは不幸だつたらうな、悲しかつたらう、そしてこの私が氣の毒でたまらなかつたらう。私が悪かつた。私は明き盲目であつた。角膜も瞳孔の收縮も、眼球の屈折度も網膜に散在する視神經の末梢部も完全であつたのに只眼を開かない、冬の朝の眠りを欲してゐる眼であつた、一度開いて見るならば外は果てしない美しい莊嚴な雪の銀世界、はかなく消去する夢の國の眺めではなかつたのになあ！私の眠りを貪らうとするのをお前は私の手首に居て戒め續けてゐてくれたのだに。莊嚴な靜寂な世界に這入つて行く、いや／＼知らず知らずの間にその氣分になりその世界が自分の体になつてしまふ、そんな大切な尊い言葉を囁いてゐてくれたお前にくらべて人間の私は何と愚な者であつたらう。お前はまあ！よくこの愧い私の体にもそんなにまで氣高くなり得る素質のあつた事を知つてゐたなあ。恥かしいが私はそれに氣づかなかつたよ。念珠よ私は今お前に懺悔のつもりで考へてゐた事を話さう！話さなくつてもお前は私の愚さを知つてゐやうが。

お前の何時もかけられてゐた處は、死にかけてゐる若さを失くしたお爺さんやお婆さんの皺のよつた腕、こはばつて行つた靜脈が青く高くその皺の間をうねつてゐる、その手首であつた。私が一度お爺さんに尋ねた事があつた、「お爺さんそのお珠々は何んです」つて、そしたらかう教へてくれたのだよ「佛様にお詣りする時にかけるものだよ」何んだつたらないものだなあと思つた、誰が考へ出したか知らないが叮嚀に色々な小さな珠に一つ一つ穴をあけて紐で通して使ふなんて、それからは私はお前を見て

も或時なんか西洋婦人の腕に光つてゐる腕輪をみて、は、東洋の方へは珠々なんて云ふ形になつて來やがつたのだなあ、それで立派に解釋したつもりで得意であつたよ、だから餘程あの乳色の肉体に輝いてゐる寶石入り等の腕輪の方が進化した美しいものだと思つた、あまましい事だつた。お前は私が氣の毒でならなかつたらう、恥しいがそう信じてゐたよ。それから或時は死人の首や手に益々私は飾りだと思ひこんでしまつた。元氣のない死骸にお經を上げてゐる坊さんの手首にかゝつてゐないと不似合ひだそれと反對に若い者の手首なんか、あ、厭だ、聞いただけでも厭だのにそれに觸れるなんて命が縮む様な氣がする、かけてゐない若い者の前にどうして出られよう、恥かしくつてたまらない許して呉れ、みんなに考へてゐたよ。未だ／＼お前を恥かしてゐた事は、いや私自身のこの尊さを恥かしてゐた事は山程ある、然しもう云ふに忍びないお前も知つてゐてくれようから止める。蒲團が物を云ふ、教へられてみれば磨かれてみれば自分の曇つてゐた鏡にでも映じをうだよ「片づけてくれ」つて引きつばなしにしておけば願つてゐる、未だ聞ゆるよ朝寢してゐれば「おい早く起きよ！」寝ざまが悪いと「眞中にさちつとお休み」こんなに云つてゐるね。もう私はあんな寶石の腕輪よりお前の方がこんなに大切なものだから教へられたよ。どんなに偉大だか念珠よ、私は埋れてゐた尊さを掘り出して行く身体になつたら、もうお前もかうなつて行く私の私について私に鞭撻する務が出来れば喜んでくれよう、土や埃に汚れてゐた腕も洗へば矢張り眞の皮膚の色が現はれよう、お湯には入つてからお前を手首にかけた感じはお前と私の膚ざわりはなんどすべ／＼してゐるだらう私の皮膚も喜んでゐるしお前の一粒一粒の珠も喜びてくる／＼まわりうた。どうか私の煩腦を縛つておくれ、もつともつと私の我をへし折つてくれ、あの麗しい月の圓さにしてお呉れ！私はお前を通してこんなにまで暖いお慈悲の現はれに對して合掌して一層の眞生を願はざるを得ない、私が尊くなりお前も立派になるように、燦として光を放つ念珠よ一儲に合掌しよう。(二、四、十六)



愛知縣海部郡津島町	藤井鶴次郎
同 佐屋村	黒宮 平八
同 黒宮 孝壽 黒宮 琴枝	
同 八開村	中野 俊一
同 鷺野四右衛門 鷺野 安信	水谷増次郎
同 大鹿玉三郎 服部梅太郎	服部よしの
同 縣西加茂郡舉母町	本多 かず
同 都築 もと	
同 縣名古屋市中區御器所町鳥喰	伊藤留吉
同 同町布池	尾上 きん
同 末廣町	鷺津 太七
同 鷺津 太一	伊藤吉三郎
同 鷺津 のぶ	
同 四日置町	渡部善兵衛
同 渡部みさを	安藤康次郎
同 小林町	淺野 孝眼
同 西區千歳町	
同 早川 孝祐	中川五十子
同 東區南外堀町	永田 貞雄
同 主税町	佐藤 忠義
同 東外堀町	山田 淳應
同 岐阜縣海津郡城山村行基寺	
同 山田 れん	

(大正十四年八月十三日) 昭和二一年五月六日印刷納本  
 (第三種郵便物認可) 昭和二年五月十二日發行 (毎月一回十二日發行) 第六卷第四號

辨榮 御慈悲のたより  
 總フリガナ五百數十頁  
 金箔附四六版箱入  
 口繪數葉付

辨榮 道 詠 集  
 總フリガナ五百數十頁  
 金箔附四六版箱入  
 口繪數葉付

(定價二圓五十錢、送料十二錢)

發行所 ミオヤのひかり社  
 振替東京六六八五一番  
 東京市小石川水道端二ノ四四

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
 振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋 觀 道  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 發行人 佐藤 忠 義

印刷人 眞 生 社  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番